

夕顔の白い花

辻 憲男（文学部教授）

「やがてあの人は、道の端（はた）で夕顔の花を見つけると、それを摘みとるのでした。手に白い花がにじんで、それが夕ぐれの色を余計に濃くするように思われました。／「なぜ結婚なんかしたんです」／わたくしは、ふと唐突に運命というものに対する深い疑問を感じると、腹立たしげに、あの人に、そう尋ねました」。…語り手は京都の大学生、「あの人」は七つ年上の人妻だった。あの人から借りた本に、小さな紙切れがはさまれていた。それとなく恋の歌が書いてあった。まもなく彼女は苦しい胸のうちを打ち明けたが、それは一方的な決別の言葉だった。わたしはいたたまれず、神戸の熊内（くもち）の彼女の家を訪ねた。交わした手紙が未練になるからと、彼女の目の前で全部破った。「じゃ、もう、これっきりですね」。わたしは終電車に乗り、無言で別れた。思い切ろうと苦しんでいる彼女に逢うことはできなかった。ストイックな「不倫」であった。二年が過ぎた。再び神戸の家を訪ねたが、うれしさよりも苦しさがつのるばかりだった。別れがつらくて、話しながら遠くまで歩いた。二人は素足で川の中に入った。彼女の足が白い魚類のように美しく見えた…。

若いころ、なるべく薄っぺらい文庫本を買って読んだ。そのなかに中河与一の『天の夕顔』があった。昭和13年（1938）の作で、海外でも評判になったという。23年間も待つ純愛などこの世のものとも思えない。そんな古風な小説は今どき読む人も少ないのか、いつのまにか書店の本棚から消えてしまった。



“あの人はわたくしを阪神電車の大石駅まで送ってくれました”